



## 20世紀初頭、イギリスは西洋近代文明の坂を登りつめた



言語社会研究科教授

井上義夫

Yoshio Inoue

1946年生まれ。

1969年一橋大学経済学部卒。

1974年同大学院社会学研究科博士課程退学。学術博士。

著書に『評伝D.H.ロレンス』（全3巻）、

『村上春樹と日本の「記憶」』等。

1996年和辻哲郎文化賞（一般部門）受賞。

### 第一次世界大戦の終結とともに 近代文明は終焉を迎えた

「不幸にも今日、人間という動物が、自然を美しくしたり飾ったりする代わりに、存在すること自体によって自然をおぞましいものに変える唯一の動物であることが、白日の下に明らかになった」（『文明、その原因と治癒』）

「不幸な患者を数時間のあいだ（せいぜい良くて数日の間）生かしておくために医者と看護婦と患者の親戚によってなされる、あの頻頻と見られる意味のない陰謀が止まることあるだろうか。その不運な病人の方は十中八九、何もせずに出来るだけ安らかに死んで行きたいと願っているにも拘らず、（無防備のために）手術や注射や、その他あらゆる種類の医学的辱しめに晒され、最後の最後まで拷問を受け続けるのである」（『愛と死のドラマ』）

いささか過激な言葉で、まるで現在の環境破壊と過剰医療の問題を言い表しているようですが、実は100年近く前イギリスの思想家エドワード・カーペンターが書いた言葉なのです。彼は

近代文明を総体として俎上に載せ、「進歩」の概念と西欧の「科学」的発想自体を批判し、宇宙と生命の根源から発して、人と生物・自然のあるべき関係を説き、女性の解放と社会進出を主張し、同性愛を自然な関係として肯定して自らも実践しています。2番目の文章が“The Art of Dying”という論に現れることから想像できるように、人はどうやって死ねばいいのか、死後に個々人の「意識」はどうなるのかという類の問題まで論じているのです。

つまり現在の時点で喫緊の課題とされている問題は20世紀初頭のイギリスでほぼ出尽くしており、逆に言うとそれだけイギリスは成熟していたことになります。

1914年に勃発した第一次世界大戦は、近代文明の総決算だったと言えます。4年以上に及んだこの戦争は、飛行機・飛行船による空からの爆撃、潜水艦・タンクの出現、毒ガスの使用など、近代科学の「粋」を集め、国民を総動員して戦われた戦争でした。僅か1週間のマルヌの戦いで独仏両軍が日露戦争で使われた全弾薬相当量を撃ち尽くしたことから解るように、そのとき人間の想像力の追いつけない、何か得体の知れないものが出現したのです。

この戦争によってイギリス社会の様相は大きく変わりました。その一つは、戦時中の非常措置が恒常化して女性があらゆる職種に進出したこと。もう一つは戦後の好景気のなかで、労働者階級の生活が飛躍的に豊かになったことです。『チャタレー夫人の恋人』で知られるD. H. ロレンスは、家庭にピアノをもつようになった鉱夫たちの生活を描き出していますが、そこに写し出されているのは消費にうつつを抜かす若者の姿です。男性はサッカーやチャールストンに、女性は新しいドレスに関心を傾け、満ち足りています。きれいな服を着て楽しめる金が欲しいだけだから社会主義者になるほどの「脳みそ」もないと言われます（第9章）。

## 日本の先鋭的文学者・思想家たちもまた同じ問題意識を共有していた

いまの日本と驚くほど似ているこの時代と社会を、同時代の日本の文学者たちも局部的ながら直感的に鋭く捉えていました。

例えば1900年頃イギリスに留学した漱石は周知の通り「個人」の問題を考えつめて神経衰弱になり、1909年の『それから』以降、個人と他者の問題を作品に言語化しましたが、これは世界的に見て最先端に行く試みだったと言えます。アナキストの石川三四郎は実際にカーペンターを訪ねていますし、白樺派の文学者たちもカーペンターに注目しました。

別の意味で興味深いのは、1924年から翌年にかけて発表された谷崎潤一郎の『痴人の愛』で、語り手の「私」がヒロインとなる女性に惹かれたのは、そもそもこのカフェで働く少女の名が「直子」などではなく「奈緒美」だったからです。しかも彼はその名を「ナオミ」と表記しますし、英語と西洋音楽を習わせ、一緒にダンスに興じ、「文化住宅」に住んで西洋的なライフスタイルに強く憧れます。ナオミは結局日本人には満足できず生身の西洋人に走りますが、登場人物の姿とこの作品を通して、ヨーロッパで問題になっていることが日本でも部分的ながら同時に、奇妙に歪んで進行していたことが理解できます。この小説が同じ谷崎の初期の作品に比べても、例えば翌年発表された川端康成の『伊豆の踊り子』に比べても、まるでアニメ映画でも観ているような錯覚を抱かせる低水準の作品であることも、70年ほど先の日本を見越した極めて「先進的」作品だった証しなのかもしれません。

## 人はどう生き、どう死ぬべきなのか 過去からの問いかけに、今どう答えていくか

20世紀初頭のイギリスの文学者たちが描き出した社会と人間のあり方は、いまの日本と驚くほど似ています。行き着くところまでいってしまった大衆消費社会、袋小路に追い込まれた文明社会の先に何があるのか、人はどう生き・どう死ぬべきなのか。D. H. ロレンスやT. S. エリオット、ヴァージニア・ウルフらは自らの文学の課題としてその問いに向き合いました。「二番煎じ」の状況にある現代の日本で、いま私たちは同じ問いを突きつけられています。現代文明の先に何があるのか、何が深刻な問題なのか、それをどう克服すべきなのか、この課題と真剣に向きあうことは、私たち一人ひとりにとっても、また研究対象としても実に興味深い、大切なことだと思います。（談）